

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 エゾテリズムのランドマークールネ・ゲノンの形而上学

氏名 岡本 倫典

ともすればオキュルティズムと、果てはイスマでさえないオカルトと、一般に混同されて、批判精神の欠如の謗りを受けるエゾテリズムではあるが、にもかかわらずそれは怪力乱神を玩弄する空理空論ではなくて、固有の論理に裏打ちされ一定の整合性を有する思弁である。エゾテリズムの対象となるのは知り得る全ての事柄ではなく、エゾテリズムによって知り得る全ての事柄なのである。このエゾテリズムをエゾテリズムたらしめ、真にその名に値する一切のエゾテリズムに共通しているものでなければならない論理を、「エゾテリズムの法典編纂者」と称されるルネ・ゲノン(1886-1951)の著作に拠りながら闡明し、ひいてはエゾテリズムが打ち捨てるべき前近代的蒙昧主義の所産ではなくて、むしろただ一つのなくてはならないものを、すなわち「一元性の教義」を教えてくれる伝統的な知識であることを強調する、それが当博士論文の企図するところである。

ゲノンの高弟の一人、ミシェル・ヴァールサンは言う、「イスマにおけるタウィードがその最も鮮明な表現であるところの普遍的な真理の意識を西洋に招来し展開すること、彼の全作品の目的と期していたのはひとえにそれであった。」この「タウィード」はゲノンの作品においてエト・ダウィードウ・ワーヒドゥン「一元性の教義は独一である」という形で何度となく表れているのだが、ここで思い起こすべきは彼のイスマ名が正しくアブデル・ワヘド「一者の僕」であるということである。では、彼がその僕であるという一者であるところの「一元性の教義」とはいったいどのようなものであるのだろうか。それは「万の物これに由りて成り」と言われるところの万物の単一原理、大なり小なり存在を有するありとあるものがそれから由来するところの存在理由、顕現するものの全てがその結果であるところの正しく第一原因である。多分に擬人主義的なニュアンスを込めて宗教はそれを神と呼ぶが、しかしながら、本論においてはそうした神学的視点においてではなく、かと言って宗教学におけるようにそれを純然人間の作物として相対化してしまうのでもなく、結局のところはエゾテリズムと同義である(少なくともゲノンの術語としては)形而上学の視点において、第一原因とその結果としての顕現を考察していくことになるであろう。結局のところ、一語によって要するに、本論において扱われているのは因果関係、およそ一切の因果関係の大元にあるそれであり、もう少し詳しく言えば、「おしなべて結果はその原因の中に可能態において前提、包含されているが、この結果の現実化によって原因は何ら影響ないし変化を受けることはしない。」結果とは原因の中に内包された可能性の展開であるに過ぎず、その故に原因は結果以上である。

しかしながら、ゲノンにせよ、あるいはより広くエゾテリズムにせよ、文学研究の博士論文の主題としては必ずしも一般的というわけでもないからには、予めある程度の説明をしておくことは必要不可欠であるだろう。よって序論では、文学に対する彼の態度について主として『ダンテのエゾテリズム』との関係において簡単に取り上げることにする。あわせてそれは、エゾテリズム自体よりも身近な題材を通じて彼の思想に触れるイントロダクションの役割をも果たすであろう。

結局のところ、文学に限らずおよそ芸術に対するゲノンの考え方は、*Ars sine scientia nihil*。「知なき術は無である。」に尽きている。芸術のための芸術、それが与える審美的な快樂のためだけの文学については、実に、ゲノンは何らの関心をも示すことをしない。彼にとってなにかずく重要であるのは、*ars* の形式を通して始めて表現可能となる *scientia* である。言い換えるならば、ゲノンとの関連において論じることが妥当である文学とは、象徴としてのそれであり、ダンテのいわゆる著作の有する四つの意味、すなわち字義的、譬喩的、教訓的、秘儀的の内の最後の意味を有する限りにおいての文学なのである。

したがって、ゲノンの作品は一般的な意味における文学であるとは言えないが、同時にそれは等しく一般的な意味での哲学であるとも言えない。何故ならば、彼が専ら論じているのは、*philosophie* 「智慧への愛」ではなくて、智慧そのものだからである。智慧への愛に基づく智慧の探求ではなく、智慧の知識そのものだからである。では、この知識を何と称するべきなのだろうか。ゲノンは答える、それは東洋の形而上学である。

ゲノンの思想の枢軸を成すのは伝統、時間や場所を始めとするあらゆる偶有的な条件を超越してあらゆる民族の聖典（もちろん宗教的なものに限らず）中に収められた啓示由来の、つまりは超人間的な起源を有する教えであり、世々相伝されてきた伝統である。そして、伝統を見失ってしまった近代以降の西洋、および近代化西洋化してしまった東洋に対して、証人として改めてこの伝統を説き明かすことこそがゲノンの役割であり、意義であった。こうした意味においてルネ・ゲノンの形而上学とは直ちに東洋の形而上学であった。第一章ではこの伝統的形而上学とはどのようなものであるのかが論じられるであろう。

語源より推して自明であるように、形而上学 *méta-physique* は自然学の彼方にある。自然的なもの、現象的なものの彼方なるそれは普遍的原理の知識である。対象となる原理は普遍的であるからには個別的ではなく、そして個別的なものを個別的なものたらしめるのが形であるからには、日本語にしてみると同語反復のようだが、形而上学は形の彼方にある。そして、そもそも形の彼方にあるからには、形而上学は言語という形によっては定義されるべくもない。したがって、この章ではむしろ形而上学とは何ではないのかを述べることによって、その本性を浮き彫りにすることに主眼が置かれている。何かを定義することとはそれが何であるのかと同時に、それが何でないのかを決定することであり、結局のところは否定の一形式に他ならないのであるから、様々な定義が形而上学には当て嵌まらないことを論じることは、逆に否定の否定によって肯定となるのである。

かくして、形而上学がオキュルティズムでも、科学でも、哲学でも、宗教でもないことを明らかにする過程で、いきおいその対象である原理の普遍的な性格を、当然言語表現の形によって可能な限りにおいて、普遍性を損ねない限りにおいて論じられることになる。しかしながら、個別的な存在である私たちは存在論的な懸隔の故にこの原理をそれ自体として捉えることはできない。普遍的原理は万物の第一原因ではあるが、この万物を離れて直ちに原理自体を知ることは私たちにはできない。そこで、第一章によって説明された原因より生じる結果が、この原因からいかにして結果が生じたのかが以降の主題となるであろう。

原因から切り離された結果だけを取り上げることに形而上学的な意味はない。何となれば、原因なくして結果がないのは道理であり、この道理を、因果律を否定したときから私たちは何事を論じることもできなくなるのであるから。第二章、第三章では、原因たる原理と結果たる顕現としての世界についての創世論的存在論的な考察が展開されるであろう。原因たる原理の結果として世界は顕現する。宗教的にいわゆる創造のように、顕現はそれを超越する原理の外部に独立して存在するのではない。何故ならば、存在理由を内に持たない何物かが存在することなどあり得ないからである。さりとて、汎神論が説くように、顕現の中に原理そのものが内在しているわけではない。何故ならば、原因なくして結果はない一方で、量的な意味でも質的な意味でも全体は部分より大きいからには、原因とは結果以上でなければならぬからである。

第二章で特に扱われるのは原理の視点から捉えられた顕現なのであるが、因果関係であるところの両者の関係を考える上で絶対に避けなければならないのは、第一原因そのものを否定する二元論の幻想である。なかんずくこの幻想への反論でなければならないこの章は、「もし神が存在するとすれば、悪は何故あるのか。もし神が存在しないとすれば、善は何故あるのか。」という神義論の根幹を成す問いへの、あるいはゲノンによって立て直された「どうして神は、もし完全であるとすれば、不完全な存在を創造することができたのだろうか。」の問いへの解答たらんとすることになる。それに対して第三章の主題となるのは、むしろ顕現の側から捉えられた原理である。万物の単一原理はどうして多数性、あるいはむしろ二元性によって特徴付けられる顕現世界を生み出すことができたのだろうか。この一から多への移行がどうして、どのようにして行われたのかが、宗教的シンボリズムに名を借りて原罪と顕現と題されたこの章の内容である。

エゾテリズムを非難する人々が千篇一律に口にするのは、それが批判精神を欠いているという評言である。実に、本論はこの評言に対する反論たらんとするものである。エゾテリズムが、少なくともその代表的な作者にあっては、いかに一貫した論理に基づいているのか、もちろんこの語の一般的な意味で科学的とは言えないが、しかしながら科学よりもはるかに精密な、科学以上に科学的な仕方、いかに見事に原理とその顕現を、言い換え

れば、宗教的であれ哲学的であれありとあらゆる教説が究極的にはその解決を目指しているところの至上の問題、神と人間と世界との関係の問題を説き明かしているのかを、おそらくは過度に単純化された形式ではあれ示すこと、本論の目的は以上に尽きている。